

'86—1

# 北海道民族学会通信

北海道民族学会

札幌市北区北10条西7丁目  
北海道大学文学部行動科学科社会生態学講座内  
(011)716-2111内線4163題字：椿坂小籬(點の会所属)  
編集：菅原和孝・口蔵幸雄  
発行者：岡田宏明  
印刷所：北海道機関紙印刷所

## 焼尻島の漁撈活動

須田 一 弘\*

焼尻島は留萌支庁苫前郡羽幌町に属し、羽幌本町から西方約24kmの沖合いに位置する離島である。人口は700人強で、現在136世帯133経営体の382人が漁業で暮らしをたてている。本報告では、1983年から現在まで続けている焼尻島での調査に基づいて、沿岸漁村の動態について、漁民の直面している問題とその対応という視点から分析を試みた。

焼尻島は江戸時代からニシン場として栄え、人口も1950年には3621人とピークに達したが、1959年のニシン漁の終焉により、漁業経営は大きな打撃を被った。北海道の沿岸漁村は、その後、「沿岸から遠洋へ」、「獲る漁業から育てる漁業へ」等のスローガンの下、漁場の外延的拡大や生産構造の転換等が図られてきたが、焼尻島では、離島という制限もあって、小規模な家族経営による漁業が営まれてきた。さらに、1977年の200カイリ宣言以降は、沿岸へUターンしたトロール漁船との資源をめぐる競合状態が生じ、漁民は一樣に資源減少への不安を口にするようになった。

こうした状況の中で、焼尻島の漁撈活動がどのように行われているかを知るために、私は四つの問題を同定し、それへの漁民の対応を分析した。第一は、漁獲の不安定性であり、この問題へは、各経営体が29種類の漁撈活動からいくつかを組み合わせて操業していること、約60%の経営体が何らかの形で兼業を行っていることで対応している。二番目の問題は資源の減少である。水族資源

は、回遊性の強い浮魚資源と、ほとんど移動しない「根付き」資源とに大別される。後者は、資源の枯渇の可能性に絶えずさらされているが、かえってそのために漁業協同組合単位での種々の規制が行われている。ところが、前者では、対象となる水族の生態がまだよく知られていないこともあって、資源の管理が困難であり、特に、トロール漁船との競合下においては、逆に資源の減少に拍車をかける状況になっている。三番目は技術革新の受容である。技術革新は労働力を減ずる効果があるが、逆に資源減少に手を貸すことにもなりかねない。最後は高齢化と後継者不足である。1970年代から、漁業と他業種との経済格差が広がる中で、漁業をめぐる問題が表面下し、新規加入者の減少、漁民の高齢化が進んでいる。

以上四つの問題は、お互いに結びついて沿岸漁業の衰退を導いている。つまり、漁獲が不安定で、減少傾向にあるので、能率的に漁獲するために技術革新を導入するが、そのことが、逆に資源の減少を招いているのである。さらに、その問題のため、青年層が漁業を離れ、高齢者が多くなるので、効果的な対応ができなくなっていると思われる。

今後は、ニシン漁終焉以降の沿岸漁村の動態の把握、焼尻島とは異なった展開を見せた漁村との比較を課題として、北海道日本海沿岸の漁撈活動の分析を続けて行きたい。

## 類人猿研究の意味

訂正会学新月刊重原男\*

化石上の証拠から、ヒトの祖先が類人猿の系統と分岐したのは、約1,500万年前といわれてきた。しかし、最近の遺伝生化学的研究は、ヒトとアフリカ産類人猿（ゴリラとチンパンジー類）が分岐したのは、せいぜい約500万年前だと主張している。この見解の相違がどのように収束してゆくのかはともかく、ヒトだけをヒト科に分類し、ほかの大型類人猿から区別する生物学的根拠は、ほとんどなくなってしまったように思われる。

霊長類、とくに類人猿の生態や社会を研究する者の多くは、人類進化という問題を意識している。化石から復原できる形態や運動機能上の特徴を除くと、ヒトの祖先がもっていた社会や生態、行動は直接証拠として残らないので、現生霊長類の比較研究から、ヒトの祖先の生活様式を間接的に復原しようという目的意識である。たとえば、現生のアフリカ産類人猿とヒト（とくに自然状態の生活を送っている採集狩猟民）の間に、共通する社会的・生態的特徴が認められる場合には、ゴリラやチンパンジー類とヒトの共通の祖先は、そのような特徴をすでに具備していたであろうと考えるわけである。

私は野生ナミチンパンジーの研究を続けているが、最近興味をもっているのは、採食活動における性差の問題である。人類進化論的立場でいえば、性的分業の起原につながるテーマということになる。この問題では、活動時間の配分（time budgets）の違いを追求する場合と、食物の内容（diet）の違いを追求する場合があり、両者は密接にからみ合っているが、どちらかといえば後者の方が、性的分業との関連で関心を集めることが多い。

ナミチンパンジーの食物内容に性差が認められることを最初に報告したのは、西部タンザニアのゴンベ国立公園で調査したマッグルーである。メスはよくシロアリを釣り、またツムギアリも沢山食べるが、オスはメスほど昆虫食をしない。とこ

ろが、肉食の頻度はオスの方が高い。メスは一頭一頭が比較的狭い地域を集中的に利用する傾向があり、よく知っている特定のシロアリ塚や、樹上性のツムギアリの巣を訪れて動物性蛋白質をまかなう。これに対して、オスは徒党を組んで広い範囲を動き回り、その結果遭遇の機会も多い脊椎動物（おもに哺乳動物）を捕食している。

私達がナミチンパンジーの調査を続けているマハレ山塊国立公園は、ゴンベの南約150kmにある。初期に集中的な調査の対象となっていた小型（20～30頭）のK集団では、ゴンベのような動物食における性差はあまりはっきりしなかった。しかし、K集団の南を遊動する大型（約100頭）のM集団では、メスの昆虫食（マハレではシリアゲアリ類とオオアリ類が中心である）とオスの哺乳動物食という傾向が、非常に顕著であることが最近になって明らかとなった。採食行動における性差は、生物的基盤に由来するが、集団のサイズや構成といった社会的要因が、狩猟効率や社会的相互作用を通じて、集団ごとの性差の現われ方に影響を及ぼしている可能性が強い。

ハンマー行動は、西アフリカのナミチンパンジーだけに知られている文化であるが、堅い果実をたたき割って内部の種子などを食べるこの行動は、とくにメスによく見られるという。コートジボアールのタイの森で調査を続けているベッシュ夫妻は、ほかのオスとのつき合いに影響されやすいオスの社会的特性と、強すぎる筋力というオスの生物的特性が、ともに彼らのハンマー行動を阻害していると考えている。

以上のように、ナミチンパンジーの採食行動における性差は、かなりはっきりしている。しかし、これが異性個体間の恒常的な分配と結びついていないので、性的分業と呼ぶことはできない。ナミチンパンジーでも、肉などの食物をめぐる分配（大部分は消極的）が認められるが、それが恒常的に見られるのは、おもに母子などの血縁のある

個体間の場合である(息子から母親へという分配も含まれる)。それでは、血縁のないところで互酬的な分配が起こるためには、どのような条件があればよいのだろうか。

これまでの人間家族の起原論では、恒常的な分配が特定のオスとメスの間の社会的・性的な絆を強めたと説明されてきた。しかし、ドゥ・ヴァールが指摘したように、霊長類研究、とくに類人猿の研究によると、食物分配のような一部でしか見られない有形の交換は、霊長類で広く認められる互酬的な社会現象から生じたと考える方が、むしろ論理的である。たとえば、血縁のないナミチンパンジー同士でも、同盟関係にあるおとなのオスの間では、肉をめぐる分配が比較的安定したものとなっているという事実は、この考え方を支持する。ナミチンパンジーの社会単位は、大型の複雄複雌集団であるが、特定のオス・メス間に性にもとづく長期的な社会関係は存在しない。しかし、発情メスはオスから肉をよく分けもらえるとい

う観察も、上記の説と矛盾しない。

ナミチンパンジーとは対照的に、性関係にもとづく特定のオスとメスの長期にわたる結びつきという点で、ゴリラは典型的な単雄複雌集団を作るが、ナミチンパンジーのような食物内容に関する性差や分配行動は観察されていない。これは、ゴリラの食物レパートリーに、性差や分配の対象となるような品目が含まれていないということで説明される。彼らは、いつでもどこでも誰でも入手できる葉や茎のような繊維質の食物を主として利用しているので、性差や分配が生じる可能性はほとんどないとみなせる。この点において、もしもナミチンパンジーがゴリラのような社会構造をもっていたら、あるいは、もしもゴリラがナミチンパンジーのような食性をもっていたらと想像をめぐらすことは、生物学的には全くナンセンスであるが、性的分業の起原を考える上では、大変示唆的であるといつてよい。

## パプアニューギニア予備調査報告

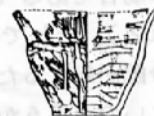
口 蔵 幸 雄\*

昭和60年7月から3カ月間、パプアニューギニアの西部州(パプア側でイリヤン・ジャヤに接する)で予備調査を行った。当調査では、昭和61年度文部省科学研究費海外学術調査(代表者大塚柳太郎、課題名「メラネシアにおける環境の多様性に対するヒト個体群の適応機構の比較生態学(第一次調査)」)のための調査地選定が第一の目的であった。パプアニューギニアにおける日本人研究者による人類生態学的研究は、1971年に東京大学医学部の大塚柳太郎氏によって着手され、その後、同氏を中心とする東京大学医学部人類生態学研究室のスタッフと院生らにより、1981年～82年に西部州低地帯(フライ川流域)で調査が行われた。昭和61年度から3次計画で行われる予定の調査は、これらの調査研究を発展させることを目的とし、調査地も、低地(標高0～50m)、山麓部(200m～500m)、高地(1,000m～)とパプアニ

ューギニアにおける典型的に異なる3つの環境に住む住民をカバーする予定である。当研究の目的は、個体群(population)としてのヒトの適応機構についてその研究方法をフィールドワークを通して確立することである。パプアニューギニアの西部州では、1,000人～2,000人からなる小言語族が族内婚の単位となるから、これらは生物学的にも個体群としての特徴を持っている。したがって、調査対象として、適当な個体群サイズといえる。予備調査では、大塚氏と2人で、低地、山麓部、高地の3地域で、それぞれ1つの言語族を選び、一地域に10日から2週間滞在し、数村から10村より成る1つの言語族のほぼ総ての村を訪問した。各村では、本調査に備えて、住民票と家系図の作成、村民の身長と体重の計測を行った。昭和61年度は高地に入る予定である。

## 奈良・平安時代の北海道

### —アイヌ文化の原段階—



岡田 淳子\*

奈良・平安時代に使用されていた土製の容器・食器には、還元煙で焼かれた灰色の須恵器と、酸化煙で焼かれた赤色無文の土師器がある。畿内では早くから須恵器が普及したが、東国や九州南半では、遅くまで土師器が使用された。

土師器は、古代日本文化（大和国家）の圏内でのみ製作されたことが知られ、細かくみれば五つの地域性がみとめられるが、全体として斉一性をもって広がっている。私はかつて、土師器の型式学的研究をすすめるなかで、約50年の時間幅でその変化がとらえられることを見出した。その後、集落址の発掘が相次ぎ、土師器の変化は平安時代末まで各地域で知られるようになってきた。

北海道でも昭和50年代に入って、土師器を主に使用していた集落址が、千歳市・江別市・札幌市等、石狩水系を中心とする地域で調査された。それらは土師器の斉一性に照らして、奈良時代末から平安時代にかけての西暦800年代に属するものが大部分を占めると考えられた。これらの土師器は東北北部を含めて一つの地域性を示している。甕型土器は使用される土地で作られるので、地域性がはっきりと表われるが、ロクロ製の坏型土器の場合は移動の際、持ち運ぶこともあり、斉一性が大きくて比較しやすい。北海道では、この坏型土器が西暦900年頃を最後に姿を消し、代って、手捏、巻上げの土器が出現する。この頃から甕型土器にも文様が描かれるようになって、古墳時代以来続いてきた、土器の大量生産への方向が、俄かに逆の方向に変えられていった。この時期は文献資料でも、渡島の「夷」に関する記述が途絶える頃と一致する。

一方、オホーツク海岸を中心とする道東北の沿岸部には、オホーツク式土器をもった人びとが居住していたが、早い文化段階の刻文土器にはA.D.650年頃の土師器坏が伴出し、後半のソーマン文土器にはA.D.850年頃のロクロ製坏が伴出している。また、道西南の海岸地帯では、続縄文土器

の最終段階のものと一緒にA.D.700年頃の土師器坏が使われていた。以上が、土器を中心とする時間的關係である。

北海道の土師器文化—以下エゾ土師文化と呼ぶ—は、それまで北海道になかった多くの文化要素を南から移入した。北大構内のサクシュコトニ遺跡の調査結果を加えて、今までに明らかにされたエゾ土師文化の新しい要素には、次のようなものがある。

付設竈をもつ方形住居址、伸展葬による埋葬墓、小河川に設けられた魚止施設、鎌・鍬などの鉄製農具、部厚い鉄製刀子、マレック型の鉄製魚鉤、糸紡ぎ用紡錘車、土製の丸玉、花矢型の木製尖頭具、米・麦・ミレット等の栽培植物。また、未だ実物は発見されていないが、後帯織機や和服型衣類、半円形の木製箕などもあったろうと考えられる。これらの多くは、その後200~300年続いた擦文文化のなかに受け継がれていった。そして、オホーツク文化との間に文化接触が行われたり、後に家屋に付設された竈がなくなり、鉄鍋や内耳土鍋で煮炊きした時期があったことも知られている。これは穀物農耕の衰退、食生活の変化を意味するものと言ってよからう。

土器を使用しなくなったアイヌ文化では、残存し難い材質が多いため、資料蒐集に限界があり、その成立を探る時にも、今回土器で行ったような細かい分析には難かしさがある。しかし、近世アイヌ文化には、エゾ土師文化や、オホーツク文化の要素がかなりはっきりと残されており、これらを通して推定することは可能であろう。すなわち、総体として見た場合には、文化の流れが能率を追求しない方向に変わった時に、その第一歩を踏み出したと言えるであろうし、個々の文化要素をみた場合には、最も多くの要素を受け継いだエゾ土師文化を、原段階として規定することができると考えられる。